

令和6年度 信濃教育会全県研究大会
佐久市立浅科中学校開催要項

研究テーマ

新たな自分の問いを生み出す探究総合

- 1 期 日 令和6年11月 1日 (金)
 2 会 場 佐久市立浅科中学校
 3 共同研究者 信州大学教育学部附属長野地区統括長 北澤 嘉孝 様
 4 日 程
 12:00 13:10 13:15 14:05 14:15 14:25 15:25 15:35 16:35 16:40 16:50

受付	移動	公開授業 下記参照	移動	開会式 会議室	授業研究会 会議室	準備	講演会 会議室	準備	閉会式 会議室
----	----	--------------	----	------------	--------------	----	------------	----	------------

- (1) 受付(生徒玄関) 12:00～13:10 ※会議室にて昼食をお取りいただくことも可能です
 (2) 公開授業 13:15～14:05

1 学年 総合的な学習	2 学年 総合的な学習	3 学年 総合的な学習
ふるさとに触れる 地域からの刺激をもとに 自分の考えと問いの 更新を目指して	ふるさとで学びふるさとで働く 「働く」に関する自己更新と 新たな問い・ これからの生活へ	ふるさとへ伝える 一つ区切りの中間発表 ～お世話になった 地域の方々への発信～
1階 1 学年フロア	2階 2 学年フロア	体育館

- (3) 開会行事 14:15～14:25
 ①主催者挨拶 信濃教育会 研究調査部長 和田 敦 様
 ②会場校挨拶 佐久市立浅科中学校長 佐藤 元昭
 ③諸連絡
 (4) 授業研究会 14:25～15:25
 ①研究発表
 ②学年ごとのグループワーク
 ③全体共有
 (5) 講演会 15:35～16:35
 ○共同研究者 信州大学教育学部附属長野地区統括長 北澤 嘉孝 様
 (6) 閉会行事 16:40～16:50
 ①会場校御礼 佐久市立浅科中学校 佐藤 元昭 校長
 ②諸連絡

5 その他

- ・各自、昼食(会場で召しあがる方のみ)、飲み物や上履きをご準備ください。
- ・公開授業は、学年を選択して50分の取り組みを観察していただければ幸いです。授業研究会は、参観いただいた学年でグループワークを行いたいと思います。
- ・駐車場は、校舎南側、または、グラウンド北側の通路を上り中庭をご利用ください。
- ・その他ご不明の点がございましたらお気軽に会場校までご連絡ください。

(浅科中学校 教頭 俵 恭子 TEL 0267-58-2101)

<50時間の「探究総合」への願い>

佐久市立浅科中学校 校長 佐藤元昭

生徒の実態と「対話力の育成」

校舎から見下ろすと、ブランド米「五郎兵衛米」を生産する田園地帯が広がる。夏には緑の絨毯、秋には黄金の絨毯、そして冬には一面の白銀と、四季移りゆく風景を囲むように、北には浅間山、南には蓼科山がそびえ立ち、風光明媚な箱庭をつくり出している。

本校に通う全校生徒150名は、穏やかで人懐こい生徒が多く、生徒会や部活動でも先輩と後輩が仲良く話し合っている場面をよく見かけます。一方で、保→小→中と、ほぼ同じメンバーで上がってくるため、学年の人間関係が固定化され、たった数人と仲良く生活できていれば良いという感覚が伝わってきます。多様性への理解という面からも心がなかなか開けていません。仲良しと上手いかなくなると、すぐに登校できなくなる生徒もいることから、日頃からどんどん生徒たちを混ぜて、コミュニケーションが取れるようにしていく必要を感じています。また、高校にデビューすると、街場の刺激を受けて急が変わってしまう生徒もいることから、日頃から自分の考えをもちながら相手と対話できる力が必要であると考えています。さらには、AI技術の急激な進化、地球温暖化による気候変動、それに伴う災害、少子高齢化など、世の中の変化を予測しにくいVUCAの時代を生き抜いていくにも、対話力が必要であると言われていています。以上のようなことから「学びや生活を豊かにするための『対話力』の向上」を本校の最重点目標としました。

対話力の定着

全校の最重点目標に「対話力の向上」が据わったことを受け、全校研究でも「対話を引き出す問いのたて方」「必要感のある対話」に着目した授業展開を構想する授業づくりも進みつつあります。授業公開の後で行われる授業研究会では、「もっとこうすれば対話がさらに広がったのではないかな」など、学習問題に迫る対話の引き出し方が焦点となる討議がとでも増えました。「対話力」の意識を全校レベルでも高めたいと願い、始業式、終業式、部活動壮行会、人権教育月間などでの校長の話の際には、生徒と対話を必ず入れるようにしてきました。生徒会は今年度の文化祭テーマを

「Innovation」とし、意見文発表、和太鼓や音楽の発表などのステージ発表ごとにフロアからの感想を発表してもらうなど、積極的なコミュニケーションを取り入れました。生徒の意識の中にも対話が定着してきています。

「対話」を維持・発展させる「探究」へ

こうして、「対話」が定着しつつありますが、さらに維持・発展させるために、総合的な学習における「探究」に目をつけました。課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ、表現の探究スパイラルをまわしていく上で、「対話」は不可欠であり、自分の課題を解決したいと願う内発的動機の中での「対話力の育成」は、大変効果的であると考えました。

一方で、「探究的な学び」への転換も大変重要です。本校の全国学力・学習状況調査における生徒質問紙のある部分に注目すると、前向きに取り組もうとはしているものの、自分の考えに自信がなく消極的になりがちな生徒が多いことが見えてきます。今、目の前（探究総合でも、教科学習でも、生活場面でも）で起きていることに自分なりの課題をもち、自ら主体的に調査したり周囲と積極的に協働したりして、その解決に向けて取り組もうとする資質・能力を育む第一歩に、「探究総合」が最適であると考えました。願わくば、どの生徒も「内発的動機」によって探究総合に前のめりになってほしいと思います。そして、学びに向かう姿勢が他の教科学習にも伝播することを期待しています。

「探究総合」を50時間

中学校の総合的な学習の時間の標準時数は、1年…50時間、2・3年…70時間、目標は、「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」と定められています。しかし、実際は、行事のための準備等にも使われてしまいがちで、探究的な学習がなかなか進んでいない現状があります。本校では、一昨年が10時間、昨年が15時間と、徐々に探究の時間を増やしてきましたが、今年度は、従来行っていた水曜日の清掃カットに加えて、月曜日もカットし、学級活動として使える時間を確保することで、「探究総合」を全学年50時間実施できるようにしました。こうして、今まで「探究にあまり触れていない生徒たちと先生方との探究総合をスタートさせました。生徒が心ゆくまで探究スパイラルをまわせることを願っています。

I 学校教育目標

志高錬成

～志を高く持ち、よりよい成果を得るために、ねばり強く自分を鍛える～

II 目指す生徒像

- 明るく豊かな生活を創り上げていく生徒
- 自分の考えを主体的に追究・表現する生徒
- 仲間の良さから学び、互いに高め合う生徒

III 研究テーマ

(1) 全校研究テーマ

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善

(2) 研究の重点

- ①「主体的・対話的で深い学び」の視点から単元展開や授業を構想し、実践する。
- ②総合的な学習の「探究総合」と各教科の「探究的な学び」との両輪により、主体的な学びの効果を高める。
- ③全職員で「めざす授業づくり・学びづくり」を共有する。

(3) 探究総合研究テーマ

「新たな自分の問いを生み出す探究総合」

IV 本年度の研究の歩み

(1) テーマ「新たな問いを生み出す探究総合」の背景

本校では、総合的な学習の時間を「探究的な」学びにシフトするために令和4年度には当時身近であったSDGsを「全学年のテーマ」に位置づけ、「10時間」取り組みました。翌年の令和5年度には前年度の実践を踏まえ、探究的な学びの時間を「15時間」とし、各学年のテーマを次のように位置づけました。

- 1 学年：「学校」「地域」の特色に応じた課題
- 2 学年：「職業や自己の探究」に関わる課題
- 3 学年：「教科横断的・総合的」な課題

このようにして取り組んできましたが、過去2年間の本校の生徒の探究への取り組みから、学習活動のほとんどが「調べて、まとめて、発表」で完結してしまう「探究総合」から、なんとか脱却しなければならないという必要感から本年度「新たな問いを生み出す探究総合」というテーマが生まれました。

(2) 共同研究者の信州大学教育学部附属長野地区統括長 北澤嘉孝先生とともに

①生徒の実態

日々の学習においては全教科で「振り返りを行うこと」の習慣化ができており、グループやペア活動等にも取り組むことが出来る生徒たちである。

一方で「自ら問いを立て学習を深める経験が不足しており課題を設定する力」が弱い。グループでの活動には取り組めるものの「友と語り合ったり、深め合ったりすること」が苦手である。

②50時間の「探究総合」

令和4年度から始まった「探究的な学び」への取り組みは10時間→15時間、そして本年度は大幅に時間数を増やし、50時間へと変更しました。

また、教育課程上の時数以外にも、学習が始まると夏休みや放課後等自主的な学習も行われるようになってきました。

③日課の工夫

過去2年間の取り組みから見えてきたことは、1時間のみの活動時間では「校内のみに活動場所が限定される」「タブレットの使用や図書館の利用に限定される」「地域や外部機関の方との関わりも話をお聞きするだけの受け身の学習に終始してしまう」という反省から、次のように工夫をしてみました。

2024年度 総合的な学習 年間計画 (兼 学習活動記録)

学年	学期	時間	1学期	2学期	3学期	その他(研修)
1	1学期	5	探究	探究	探究	探究(オンライン)
2	1学期	5				
3	1学期	5				
4	1学期	5				
5	1学期	5				
6	1学期	5				
7	1学期	5				
8	1学期	5				
9	1学期	5				
10	1学期	5				
11	1学期	5				
12	1学期	5				
13	1学期	5				
14	1学期	5				
15	1学期	5				
16	1学期	5				
17	1学期	5				
18	1学期	5				
19	1学期	5				
20	1学期	5				
21	1学期	5				
22	1学期	5				
23	1学期	5				
24	1学期	5				
25	1学期	5				
26	1学期	5				
27	1学期	5				
28	1学期	5				
29	1学期	5				
30	1学期	5				
31	1学期	5				
32	1学期	5				
33	1学期	5				
34	1学期	5				
35	1学期	5				
36	1学期	5				
37	1学期	5				
38	1学期	5				
39	1学期	5				
40	1学期	5				
41	1学期	5				
42	1学期	5				
43	1学期	5				
44	1学期	5				
45	1学期	5				
46	1学期	5				
47	1学期	5				
48	1学期	5				
49	1学期	5				
50	1学期	5				

1 学期のサイクル (16時間)	1 時間のみ (26回)
2 学期のサイクル (27時間)	2 時間続き (14回)
3 学期のサイクル (7時間)	1 日総合 (5時間×2日)

このように2時間続きの「総合」を設定することで、「外部講師の方をお招きする」「講演会」に終始せず、地域に出かけて「自分がしたいこと」に挑戦できる環境を設定しました。また、オープンエンドの日課にすることで、時間に追われる心配も無く活動の範囲が広がりました。

⑤ 探究スパイラルを回す

(4) まとめ・表現

- ▶ 今まで、多様な視点で課題解決に向けた学びを深めてきましたが、最後にまとめて表現すること、すなわちアウトプットすることで探究学習としての質がさらに高まる。
- ▶ 情報の整理・分析を行った後、自分自身の考えとしてまとめ表現を行うことで、課題がより鮮明になったり、違う課題が見えてきたりと、さらに深まりのある探究活動に繋がる。
- ▶ 結論は何か、どのように表現したら正確に分かりやすく伝えることができるかなど、表現方法をあらかじめ主体的に考え、構成することで、その後の反省や検証がある場合も効果的なものとなるでしょう。
- ▶ 伝えるための具体的な方法を身につければ、今後プレゼンテーションを行う場でもスムーズに表現することができる。

▶ 探究学習の「4つの過程」

(1) 課題の設定

- ▶ 探究学習において、一番重要といわれているものが、この「課題(テーマ)の設定」です。
- ▶ 自分自身で探究すべき課題を設定するのですが、他者から言われて課題を設定するのは探究学習として成り立たなくなります。
- ▶ 具体的には、フィールドワークや資料・グラフなどを用いてシミュレーションや比較検討をし、起こりうる問題を明確にすることで課題を設定することができます。
- ▶ テーマを設定する際の注意点として以下の3点が挙げられます。
 - ① 気軽さ(身近な疑問)
 - ② 解釈の多様性(答えは1つではない)
 - ③ 深い学びへの可能性(テーマの深掘り)
- ▶ 大きな規模の課題ではなく、あくまでも自分の身の回りの課題を主体的に見つけることから、探究学習がスタートします。

(2) 情報の収集

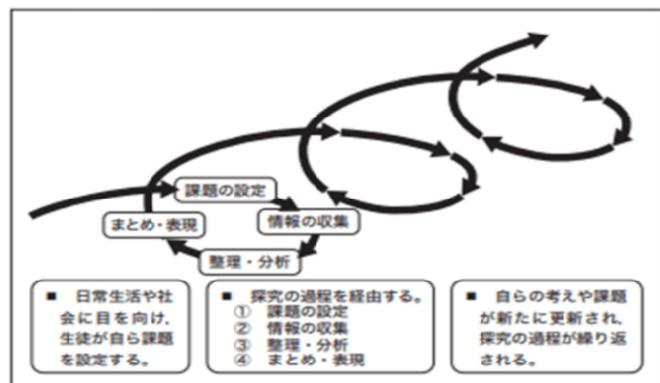
課題が決まったら、次は情報の収集です。

- ▶ 設定した課題に対して、どのようなプロセスを経てアプローチするのを考えていきます。
- ▶ ネットや書籍で調べるのか、または観察してデータ収集するのか、方法はさまざまです。
- ▶ 情報収集もテーマ設定と同じで、誰かからやらされるのではなく主体的に行われなければなりません。
- ▶ ここでの注意点が、情報収集の方法は1つに絞らないという点です。
- ▶ 幅広い情報収集を行うことで、情報が偏ることを防ぎ、それぞれの情報収集方法のメリット・デメリットを体感することができます。
- ▶ 加えて、視野を広く持ち、多くの情報から必要なものを取捨選択しより精度の高い情報にする、情報収集力を鍛えることが期待されます。

(3) 整理・分析

- ▶ ある程度情報が集まってきたならば、次はその情報をもとに整理・分析をします。
- ▶ 課題解決のために収集した情報を整理し、可視化してさまざまな視点で分析することが重要。
- ▶ 何も学びがないまままで終わらせないためにも、具体的な方法やツールを決め、比較や分類をしたり、序列化や関連付けたりして考えることで、幅広い視点を用いて課題に関する因果関係を導き出すことができる。
- ▶ このプロセスを経て、自分の考えを明らかにしていく過程(道のり)が探究学習のおもしろさともいえる。

探究における生徒の学習の姿



- ⑥ 「探究スパイラル」をベースに、「新たな問いを生み出す」には、、、北澤先生との共に語り合う1学期の(サイクル)を通しての学び

本年度は4回の「探究総合」の研修会を設定しました。

【4月16日(火)(第1回研修)】には北澤先生にご来校いただき、全校オリエンテーションを参観いただきました。その後各学年の総合の係と語り合うことでの次のようなご示唆をいただきました。

【1学期のキーワードにスポットライトが当たる瞬間】

- ・丁寧なオリエンテーションがとても良かった。
- ・研究テーマを子どもたちと共有できていたことは素晴らしい。
- ・学校の目指すところを生徒が語れること、そして学校は生徒の姿で語ることが説得力につながる。
- ・カリキュラム開発は「教員にとっても探究」である。
- ・まさに「正解のない問いの追究」である。
- ・「大いに職員間で議論し、やってみては修正をする」を積み上げる。
- ・カリキュラムの構成要素は「目標、方法、内容、評価」である。

【教師への宿題】

- ・書籍を読むこと ・実践者の話を聞くこと
- ・他校を視察すること ・職員が刺激を受けること

【9月4日（水）（第3回研修）】には北澤先生に2時間続きの総合を参観いただいた。また2学年の中間発表会では、調べ学習で終わらない、新たな問いを生み出すヒントとして、「教師による生徒への突っ込み」「問い返し」「仮説を持つて取り組んでみてはどうか？」等、生徒と直接対話をしていただきました。北澤先生のアドバイスを聞いている生徒の目が輝いた瞬間でした。

⑦スプレッドシートを介しての学びの深まり

性別	7月5日	7月12日	事業所・お店・人物等 記入欄（8/30）	調べ学習からの 脱却 ○：脱却 ×：調べ学習の み	【サイクルの段階】把握 ①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめの表現 ⑤新たな問い	8月30日
	例 ○○という課題になった。	例 △△に行って調べてみた。○○ということが分かった。	例 漁科商工会議所○○様 佐久市役所○○課○○様 ○○産店○○様			例 まとめたら「○○」という新しい課題が見えてきた。
男	農協さんに電話するための原稿ができたので次回は電話をする	電話ができた。農協さんがどんなふうにお米を売っているかがわかった。	農協様	×	②	外出予定を立て始めた。次回などに行きたい。
女	福祉施設で困っていることはなにか。次回はインタビューに行けるようにわからないことを見つけて出す	職員さんや家族の人へのアンケートができてきたから、次回はインタビューをしに行きたい		◎		アンケートを印刷できた。電話をかけることができた。
女	在来種について調べて見ると昔からいた物ということが分かった。次回は外来種について調べる。	在来種についての増える理由や対策が分かった。次回は在来種が増える理由を調べたい。		×	②	在来種、外来種の種類について調べたい。次回は、外来種、在来種がどんな影響を与えているのか調べたい。
男	高齢化率の最新の情報を入手することができたので過去の高齢化率も調べて違いを調べる。	過去の記録と最近の記録の違いがわかったから違いが生まれる理由を調べる。		×	①	仮説を立てて、仮説がっているかを調べる。

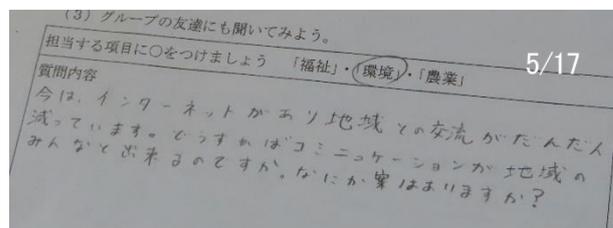
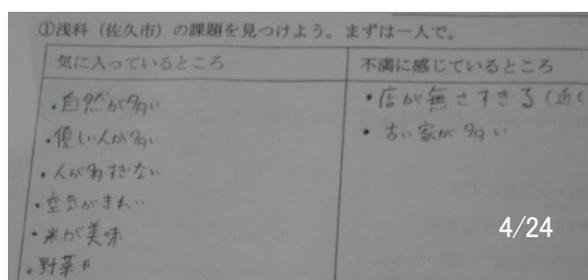
スプレッドシートには「活動の記録」「スパイラルの段階（自己評価）」「企業名」等を記入します。全校生徒と職員が活動の様子を「共有」できるのではないかと試しに取り組んでいます。

このスプレッドシートをもとにして、対話を通じて、生徒同士の関わりや交流、学びの深掘りが行われることを期待しています。

V 各学年の歩み

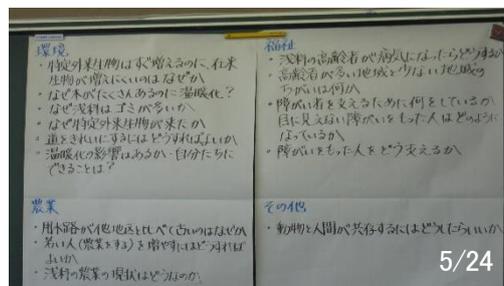
(1) 1学年のあゆみ

4月の探究総合オリエンテーションにおいて、「ふるさとに触れる（1年）」→「ふるさとで学ぶ（2年）」→「ふるさとへ伝える（3年）」と段階を踏んで「ふるさと（浅科・佐久市）」をテーマに学習を深めていくといった説明がありました。学級に戻り、「ふるさと」の良いところと問題点をあげ、その中から自分の関心事をマンダラチャートに書き出し始めました。しかし、「浅科には大型店がない」「五郎兵衛米がおいしい」「景色がきれい」などは書けるもののそこから先には深められず、問いを生み出すまでには至らないのが現実でした。そこで5月17日は「さいと学アワード (YouTube)」を視聴して、動画の中の3年生は、どんな課題で探究していたのか確認し、自分たちの挙げたキーワードからどんな課題が出せそうか考えてみるよう促した。また、プロのプロセス (NHK for School) より「課題の調べ方」を視聴し、「虫の視点」でふるさとの気に入っている点や不満に感じる点を各自で書き出し、「鳥の視点」で考えたことをグループで交換しながら、ふるさとの課題だと感じるところを見つけながら話し合った。



5月24日には外部講師による「環境」「福祉」「農業」についてのお話を聞いた。講演会後の6月7日は各学級でのグループごとに問いを挙げ、各自の問いを決めだした。生徒一人一人に意識や思考の差があることから、1学年では決めた問いが似ている生徒を数人ずつのグループにして探究していくことにした。

中学1年生では、漠然とした疑問から問いを見つけ出していくことはややハードルが高く、ふるさとで働く人による講演が興味関心を持たせ、探究の方向に向かわせていくためのとっかかりとなったように思える。グループで探究していく中で探究の仕方が分かったり新たな自分の問いが見つかったりして、2年、3年では個人で探究していけるようにしていきたい。



6月19日は「情報の集め方」(NHK for School)を視聴後、各グループごとにテーマについての探究が始まった。以後、10時間ほど探究の時間があつたが図書館の本やインターネットでの調べ学習が中心となり、当初に立てた問いに近づいていけなかったり調べ学習のみで安易な結論を出してしまったりする生徒もいた。

そこで10月10日に中間発表会を実施することを伝え、「どんな問いを持ったか」「これまでどんな(調べ)学習をして、何が分かってきたのか」「そこからどんな仮説を立てたのか」と、10月22, 23日の一日総合での活動を職員がつかむために「その仮説を検証する為にどこへ行って何を聞いてくるのか」を発表項目に盛り込むよう伝えた。

中間発表会では、発表を聞く他のグループから疑問点や仮説に対しての意見を出してもらったり職員からも視野を広げられる意見を出したりして、一日総合での活動の見直しができる機会になるようにした。この発表会后、一日総合での活動を各グループで再検討し、当日に向かうことにした。

ふるさとで学び、
ふるさとで働く

このテーマを受けて、一人一人が問いを立てる

(2) 2学年の歩み 合い言葉は、小さなうねりから、大きなうねりへ

【第一步】 ～問いなんて、簡単に見つからない～ 4月

2学年探究テーマ「ふるさとで学び、ふるさとで働く」。このテーマを受けて、一人一人が問いを立てようと生徒たちに声をかけた。さらに、そもそも探究とは？イメージをもってほしくて、NHK for School の番組「こうする！「働く」を考える～北海道教育大学付属札幌中学校2年」を視聴した。そこで登場した「佐藤君」の追究と問いの変容のすごさに、思わずため息が漏れ、教師の「問いは見つかりそうですか？」の問いかけに、ほぼ全員が、「問いなんて、簡単に見つからない」の反応を示した。「問いは先生から受けるもの」と、とらえていたのだから無理もない。予想された反応であった。そこで、「ふるさとで学び、ふるさとで働く最も身近な人」として、保護者の皆さんへ「働く」ことについてインタビューすることにした。(みんなで47項目の質問を考えた。5月連休を使って、保護者の職場を訪問した生徒もいた)

【第二步】 ～問いバンクから、問いを借りてくればよい～ 5月

保護者への「働く」インタビューの結果をグーグルスライドにまとめ、昨年度1年生の総合学習で行ったポスターセッションの経験を生かして、スライドセッションをすることにした。質問に対する保護者の答え、そこで感じたことなどをグループ内で発表し、ここからどんな「働く」に関わる問いが考えられるか出し合い、ホワイトボードに書き出した。このホワイトボードが12班分そろったところで、これらを「問いバンク」と呼び、ここから自分の問いを借りてくればよいこととした。

(次の時間には、追究する方法についても同じようにし、「方法バンク」とした)

「責任って何？」問い設定の理由

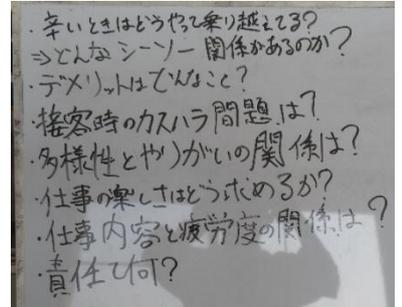
保護者に仕事についてインタビュー
 ⇨班で発表 私の親「責任感が強くなる。」
 ⇨メリットとしている。
 太田くんのおばあちゃん「責任の圧を感じる。」
 ⇨デメリットとしている。
 と、お互いの親どうし責任についての感じ方が違った。

疑問：なんで同じ「責任」なのに、感じ方が違うの？
 問い設定：「責任って何？」

↓

実際にインタビューに行ったり、インターネットで調べたりして、仕事の責任についての理解を深めよう！！😊

- グループ内で発表したとき、「働く責任」について、保護者のとらえ方がちがうことに気づいたHA生は、「なんで同じ責任なのに、感じ方が違うの？」という疑問をもった。こういうギャップに問いが生まれやすいことがわかる。(←左参照)
- また、A組のTY生は次のように生活記録に書いている。
 「自分は学年全員が集まったとき、B組に出ていた「働く＝お金なら、専業主婦は仕事じゃない？」という疑問について関心をもちました。なぜなら、自分の母も専業主婦で、身近なことだと感じたからです。

**【第三步】** ～つまずき、追究させる難しさ～ 6～7月

▲生徒の追究の希薄さ：情報の収集(追究の時間)を全6時間確保したが、インターネットの検索、図書館の本の利用がほとんどであった。6時間の中で、地元の企業にアポを取り、実際に質問に出かけた生徒は、延べ17名(55人中)であった。この結果、どこかから借りてきた言葉で済ますことが多くなった。「時間を確保すれば生徒は動く」とは限らない。

▲整理・分析の時間の不十分さ：集めた情報を整理し、自分の問いをもとにすると、どんなことが言えるのか、まだわからないことはどんなことなのか、このような思考する場面をきちんととらないまま、スライドにまとめる作業に入らせてしまった。この結果、問いと調べた内容のズレ、すなわち「問い」がいつの間にかどこかへ行ってしまう生徒がいた。

▲生徒の追究・思考・問いを、教師が見とれない：教師は、その子の追究のエピソードを語れるようになりたいが、その過程を見逃してしまっていて、どのような追究を続けているのか(「働く」に関するアップデートができていないのか)把握できない。従って、適切なアドバイスができない。

【第四步】 ～学年宿泊行事で「働く」を考える～ 7月

学年宿泊行事「キャリア農林体験学習」を、探究総合「働く」を考える機会とし、八ヶ岳農業実践大学校、伊那食品工業、セイコーエプソンのどれか一つについて、自分の問いを元に事前学習し、当日の夜の学習会で発表会を行った。伊那食品、セイコーエプソンでの企業講話と見学では、最後に質問の時間をとったところ、何人も生徒が自分の問いを質問する姿が見られ、探究の小さなうねりを感じ取ることができた。

【第五歩】 ～講師北澤先生からの指摘～ 9月

夏休みの課題であった「職場体験の業種(職場)調べ」についてのスライドセッションを行ったKI生と、講師の北澤先生との右のやりとりがあった。

これまで、「問いをもつ」→「追究する」ということしか考えていなかったが、北澤先生の「問いに対する仮説を立てる」ことに目から鱗が落ちる思いがした。仮説を立てれば、確かめる必要感も生まれ、主体的な追究につながりやすい。また、予想通りである仮説もあれば、予想外で新たな発見になる場合もある。この「予想外」のギャップが新たな問いの生まれるもとになるかもしれない。さらに、この場面の北澤先生のように、教師は生徒に、引き出す・広げる・ふくらめるための「やりとり」を心がけたい。生徒の問いや考えを誘発する「ツッコミ」を入れていくことで、生徒の自立的な追究を支援したい。



校区にある企業へのインタビュー訪問



伊那食品工業の企業講話で、質問する生徒

北澤先生：あなたの問いは何ですか？

KI生：「お金以外のやりがいとは？」です。

北澤先生：その問いについてどんな仮説を持っているのですか？

KI生：ありがとうございますと言われることとか、良い製品を作って喜ばれることとかだと思います。

北澤先生：その仮説を持って職場体験に行ってみて確かめることが大切です。行って確かめれば、やっぱりそうだったか、ということもあるだろうし、仮説でない新たな発見があるかもしれない。そういうことを大切にやっていきたいよね。

(3) 3学年の歩み

1 テーマを決める 4・5月 ～持続可能なふるさと浅科・佐久市を～

学年探究テーマ「持続可能なふるさと浅科・佐久市を」を受けて、一人一人がテーマを設定しようと生徒たちに声をかけた。生徒は、ふるさと浅科のよいところや課題をあげさせ、大まかな分野ごとに生徒を分けていった。大きく捉えると「環境」「農業」「福祉」などが出てきた。生徒からは、視野を広げるためにも地域のことを知っている方々から具体的な話を聞きたいという要望が出された。生徒の声を聞いて「環境」に関しては、佐久市環境科の方々、「農業」に関しては埼玉県から浅科に移住して米作り農業をされている黒田さん、福祉関係では中学校近くの福祉施設で働いている前田さんと高橋さんをお招きすることにした。



農業に関わる黒田さん

2 テーマの焦点化 6月 ～外部講師の先生方から具体的に～

佐久市環境科の方から聞いた、特定外来植物「オオキンケイギク」や「アレチウリ」に興味を持ち、身近な植物に関心を持ち始めたN男さん。五郎兵衛新田に囲まれたところにある浅科中学で農家の跡継ぎ問題があることに疑問を持ちながら、黒田さんの話を聞いて、さらに農家の跡継ぎ問題を深めようとしたN女さんとM女さん。そのほか、浅科矢島地区で作られている「矢島豆腐」を知り、探究したいと願いを持った4人の女子生徒。福祉施設見学を希望する生徒たち。個人で探究でも、グループでもよいことにしたが、最終的には「ひとり一発表」ということにした。「環境」「農業」「福祉」以外にも、生徒が身近なふるさとの課題を探究しようと動き始めた。しかしながら、なかなかテーマを見つけられない生徒もいた。そんな生徒とは、教師が、生徒の興味から、テーマを探り出そうと対話（問答）して、生徒自身がテーマを見つけ出すことができた。

3 夏休み前中間発表 7月 ～テーマとこれまで調べたことそして夏休みを含めた今後探求したいこと～

クロムブックなどを持って、取材に出かける生徒。電話をかける生徒。インターネットで調べる生徒。それぞれが調べ、発表の準備をして、夏休みも含め今後何を調べていくか、どのような方法で探求していくか動き出した。そして、7月中旬、二つの教室と音楽室の三カ所で、スライドを使って全員が発表をした。大切なのは、発表に対する質問であることを伝え、発表者と質問者の対話（問答）が行われた。

4 夏休み明け中間発表 8月 ～受験生は、夏休みも夏期講習などで多忙であった～

夏休み中、中学3年生の受験生は、おそらく「探究どころではないだろう」と、想定の内だったのだが、その予想以上に探究は進んでいなかった。

夏休み明け夏休みの成果の発表では、正直にやっていないことを告白した生徒が多かった。しかしながら、「矢島豆腐」をテーマに決めた4名の生徒は、「矢島豆腐」の原料は、100%浅科産の大豆であることを知り、その大豆の成長の観察を夏休み中、続けた。また「浅科カボチャ」（見た目はヘチマのような細長いカボチャ）の存在を知り、浅科にある道の駅「ホットパーク浅科」の栗林さんとともに、「ホットパーク浅科」の土地をお借りして浅科カボチャを栽培した。草取りをして、成長の記録をとり続けた。いくつかの個人やグループは、夏休み中に着々と活動することができた。



5 「校外探究調査願い」企画書 9月 ～発表会時であっても、校外で探究を意欲的に進める生徒～

夏休み明け発表会の時に、校外での調査やインタビューを希望する生徒もいた。生徒の望は多岐にわたる為、生徒の探究の進捗状況を把握したり、インタビューの内容を「良質な質問」にしたりするために、「校外探究調査願い」の企画書を書かせることにした。インターネットでは調べられない、電話では聞けないことなのか、その曜日のその日の時間が適切なのか、教師との対話の後、企画書を提出させた。アポイントメントが必要な生徒は、自分で連絡を取っていた。学年職員で企画書をチェックして、（許可・条件付き許可・後日許可・再提出・不許可）などに判定し生徒に返した。そのことによって、生徒はさらに相手意識を持って調査を深めることができたようだ。許可された生徒は、電話やメールなどで聞けること以外を、自ら足を運び調べていた。

6 「ひとり一探究」の発表 10月 ～歩みを止めない探究へ～

グループで調査活動をしていた生徒は、前段は同じでも、それぞれがテーマを分けて探求していくことを条件に探究を進めてきた。「グループ」での探究から、徐々に、「個人」での探究に移行していく。

また、生徒は、調査でもアンケートでも、まとめて発表すると、満足して歩みを止めようとする姿がある。発表の時に、発表を聞いてくれた生徒の質問が、発表者に気づかせ、視野を多角的に広げ、さらなる探究へとつながることがある。教師側としても、歩みを止めないアドバイスを心がけている。例えば、「～の場合はどうかな」「～インタビューの範囲それだけでいいのかな」「～そのことがふるさと浅科にどんな意味があるのかな」等々。歩みを止めさせない教師側からのアドバイスや対話が非常に重要である。

10月中旬現在、浅科カボチャ男子3人グループは、10月20日(日)の浅科ホットパークのイベントに参加するため準備をするようだ。

また、新しいニュースが舞い込んできた。学校からほど近い浅科温泉「ほのかの湯」の経営を佐久市が令和7年3月で打ち切るという。そのことに反応した男子2名が、テーマを変え、「ほのかの湯」存続の危機に対して探究を始めたいと相談に来た。ふるさと浅科に関わるタイムリーな話題に対して、教師側は、もちろん首を縦に振った。OKである。この時期から、どこまで深められるかは課題であるが。

7 一つ区切りの中間発表 11月 ～お世話になった地域の方々への発信～

これまでお世話になった方々を招待し一つ区切りの中間発表を開催する。

VI 当日授業の概略

(1) 1 学年

(授業者：中村郁・長井恵子・高田由香里・大口麻矢)

①学年テーマ「ふるさとに触れる」

②単元名「私たちのふるさとの課題はなんだろう

～課題意識をもって地域を見つめ、自分たちにできることを考える～」

③本時の主眼

ふるさとについて似た問いをもった者同士のグループで問いについて調査した結果から仮説や新たな問いをもって1日総合の日に現地調査をしたり現場の方の話を聞いたりしたことをまとめて発表した生徒たちが、もらった質問やアドバイスをもとに、新たな問いや仮説を立てたり、はじめにもった問いに迫る手立てを考えたり、6年生にどんな提案をしていくかを考えたりする活動を通して、今後の探究活動に対する見通しをもつことができる。

④本時の位置 全50時間中38時

前回：1日総合の日を通して学んだことをまとめ、発表して質問やアドバイスを出し合った。

次回：本時で立てた見通しを元に、各グループで探究活動を行う。

(2) 2 学年

(授業者：篠原義光・木内良夫・小菅 京・市川真紀)

①学年テーマ「ふるさとで学び、ふるさとで働く」

②単元名「『働く』を考える

③本時の主眼

「働く」ことに関わる自分の問いと仮説をもって職場体験を学習し、実際に働いたことでわかったことや考えたこと、仮説に対する答えなどをスライドにまとめた生徒たちが、お世話になった職場担当の方へのお礼状の内容について考える場面で、グループでスライドセッションしながら、「働く」に関して自己更新できたことや、新たな問い、これからの生活に生かしたいこと等をやりとりする活動を通して、職場体験での学びをまとめることができる。

④本時の位置 全50時間中の38時間

前回：職場体験学習で、実際に働いたことでわかったことや考えたこと、仮説に対する答えなどをスライドにまとめた。

次回：「働く」に関して自己更新できたことや、新たな問い、これからの生活に生かしたいこと等、職業体験での学びを礼状に表す。

(3) 3 学年

(授業者：武内洋文・花見紗百合・中村仁美・関島美和・小木曾広隆)

①学年テーマ「ふるさとへ伝える～持続可能なふるさと浅科・佐久市を～」

②単元名「探究の成果をまとめ、発信しよう
～お世話になった地域の方々への発信～」

③本時の主眼

これまで問いと仮説をもって探究してきた生徒たちが、探究の成果をお世話になった方々や友だちに発表する「中間発表会」での発信を通して、発表後の問答や対話でのやりとりで出た重要な点に気づき、「質の良い発信」に練り上げるための見通しを持つことができる。

④本時の位置 全50時間中の38時間

前回：発表の準備を行ったり、探究を深掘りしたりして、個々またはグループ毎に探究を行った。

次回：中間発表の続きを行う。

⑤その他（参考）

一つ区切りの中間発表 11月
～お世話になった地域の方々への発信～

場所：3階音楽室

これまでお世話になった方々を招待し一つ区切りの中間発表を開催する。生徒は、現在も探究活動中であるため、テーマなどは変更する可能性がある。表するテーマは、直前に決まるが、いくつかの候補を箇条書きで紹介する。

浅科カボチャを育てて

福祉施設を訪問して学んだこと

浅科地区にある特定外来植物「アレチウリ」の分布

浅科地区に生息している特定外来動物「オオクチバス」「ブルーギル」について

浅科矢島地区で作られている「矢島豆腐」

浅科地区の農家の跡継ぎ問題

温度による二酸化炭素濃度の違い

佐久市による営業が終了する浅科「ほのかの湯」について

他にも様々

当日テーマをお知らせいたします。